

Title	apadāna/avadānaについて
Author(s)	河崎, 豊
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2000, 34, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4564
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

apadāna/avadāna について¹⁾

河 崎 豊

0. 十二分教中の avadāna [Av] における Av の語源・原始形態については、未だ定説は得られていない。本稿は、従来殆ど顧られなかった pāli [pa] における apadāna [ap] の用例の検討により、Av の原義の解明の一助としたい。pa の ap の用例は *A Critical Pāli Dictionary*[CPD] (begun by V. Trenckner, Copenhagen, 1924-) にほぼ網羅される。CPD は ap の意味を：1. 切断 2. (a)刈入れ、刈取り、収穫 (b)収穫作業、刈り取った畑 (c)偉業、結果、作業 (価値ある行為) (d)そういった行為の物語又は報告、とするが、これらの意味は修正を要する。

1.1 まず、ap が「切り分ける」意味で用いられる箇所を、*Aggaññasutta* に見出す：atha kho tesam vāsetṭha sattānaṃ badālatāya antarahitāya akatṭhapāko sālī pātur ahoṣi...yan taṃ pāto pātarāsāya āharanti sāyaṃ taṃ hoti pakkamaṃ paṭivirūḷhaṃ, nāpadānaṃ paññāyati. 「次にヴェーセッタよ。彼ら有情達にとってバダラーターが隠れた後、耕さずに熟すサーリ米が現前したものとなった……朝に朝食の為にそれを取ってくれば、それは夕方にも熟し再び生長したものとなり、**ap** は知覚されない。」(D III, p. 88)

後にこの米を食べる事によって男女の性器が生じ、セックスが行われる。更にこの米を刈り貯めて数日分貯えると、米に槽と籾殻が生じ、「刈っても再生せず ap が知覚され (lūnam pi nappaṭivirūḷhaṃ apadānaṃ paññāyittha)」る。註釈は以下の如し：nāpadānaṃ paññāyati ti alāyikaṃ hutvā anūnam eva paññāyati. 「nāpadānaṃ paññāyati とは、刈られていないものと

なった後に、他ならぬ欠損なきものが知覚される〔という意味。〕(Sv p. 869);
 apadānaṃ paññāyitthā ti chinnaṭṭhānaṃ ūnaṃ eva hutvā paññāyati.
 「apadānaṃ paññāyitthā とは、切断された場所が、他ならぬ欠けたものとなっ
 て知覚される〔という意味。〕(loc. cit.)

註釈は ap を「刈られて、切断された場所」と理解する。さて同経には、
 平行箇所を有する多くの仏典が存在する²⁾。その内 *Mahāsaṃvartanīkathā*
 [ed. K. Okano] 3.2.2 では : saṃgrahadoṣanidānaṃ dṛṣṭvā śāliṣu
 vibhāvyaṃ *apadānaṃ*/śeṣaṃ ca kaṇaṭṭhaṃ jano jagrahe svadoṣaṃ
 ayam// とあり、ap を用いているが、*Mahāvastu* [ed. E. Senart] において
 は ap が avadāna に置換される : śāli akaṇo atusaḥ surabhitaṇḍulaḥ
 prādurbhaveyā sāyaṃ lūno so kālyaṃ bhavati jāto pakvo virūḍho
avadānaṃ pi se na prajñāyati (I, p. 341f.).

更に、*Saṅghabhedavastu* [ed. R. Gnoli] (SBhV) では、ap は「刈る」を
 示す語で言い換えられる : ...sa sāyaṃ lūnaḥ kālyaṃ pakvaś ca bhavati
 prativirūḍhaś ca/kālyaṃ lūnaḥ sāyaṃ pakvaś ca bhavati prativirūḍhaś
 ca iti lūno lūnaḥ prativirohaty **avalavaś** ca prajñāyate (I, p. 11).

太字部分は、Gnoli によると写本では abalaś とあり、彼は alūnaś と訂
 正する。彼の訂正は一理あるものに見えるが、p. 14 で彼は ‘lūno lūno
 na prativirohaty abalaś ca prajñāyate’ と校訂し、Gnoli の訂正には問題
 が残る。そこで Gnoli の挙げた蔵訳の平行箇所を見ると、‘brīas par yañ
 mñon no’ とある。一方 *Mahāvīyūtpatti* no. 5305³⁾ (榘 : 5314) には、
 ‘avalavaś⁴⁾ ca na prajñāyate’ とあり、その蔵訳を ‘brīags par (榘 : sar)
 yañ mi mñon とする。この事より、abalaś は元々 avalavaś と有った可能
 性が強くなる。b/v 字は SBhV の写本では区別出来ない⁵⁾ ので、abala- は
 avala- と読まれても良い。-va- 音の脱落は、写本書写時のミスと想像され
 る。故にこの箇所では、ap を明確に「刈る」で言い換えていると看做され

る。尚、諸漢訳では、『世記經』(大正新脩大藏經 [T] 1, p. 148b-c)「収後復生無有莖稈。……収己不生有枯稈現……収己不生現有根稈(三本では「故株)」；『起世因本經』(T1, p. 416b)「未刈之處。依舊而住(?)」；『婆羅婆堂經』(T1, p. 675a)「朝刈暮生暮刈朝生。熟有鹽無生氣(?)」；『根本說一切有部毘那耶』(T23, p. 635c)「……復數取而無異狀(?)」とある。

さて数種ある *√dā* の内、この文脈に合うのは ‘mähen, abschneiden’ の *√dā* と ‘teilen, verteilen, abtrennen, abteilen’ を意味する *√dā* との何れかであろう⁶⁾。この箇所 of ap は「刈る」を意味するのが相応しい様に見えるが、諸々の skt. 辞典を見る限り、この意味での *√dā* が apa もしくは ava と共に用いられる例は存在しない。ava と共に用いられる *√dā* は ‘teilen, abtrennen’ を意味する方⁷⁾であり、その点で言えば此処の ap も ‘teilen’ を意味する *√dā* の方が望ましいので、avadāna の Veda 以来の用法を踏まえ、この箇所は「稲を切り分けた切り跡」という意味で用いられていると理解しておきたい。ただ、両語根とも意味が似通っている為に、この經典が編纂された時代には意味が交錯していた可能性も否定は出来ないが、何れにせよ広い意味で「切った跡」を意味する事は明らかである。また、CPD の挙げる 2.(a) の意味を訂正すべきである⁸⁾。

次は蔵外文献になるが、Vism では次第乞食 (sapidāna) の説明に際し、ap を「分割を離れる事」と解する：dānaṃ vuccati avakhaṇḍaṃ. apetaṃ dānato ti apadānaṃ anavakhaṇḍanaṃ tti attho. saha apadānena sapidānaṃ⁹⁾ avakhaṇḍavirahitaṃ anugharan ti vuttaṃ hoti... 「dāna とは avakhaṇḍa (分割する事) と言われる。dāna から離れて行った、というので ap であり、分割ならざる事という意味である。ap と共に [というので]sapidāna であり、分割を離れて、家毎にと言われたものとなる……」(p. 60)。

この解釈は Pāṇini を踏まえたものらしい¹⁰⁾が、apa を apeta に解し「dāna を離れて行った」とするのは、sapidāna を説明する為に無理矢理こ

じつけた解釈の感が免れ得ない。上記解釈に矛盾を来す例として、Vin の *anapadāna* という術語がある。この語は Vin 内では定義付けされず、註釈によってのみ現時点では意味を知る事が出来る。そして註釈は *anapadāna* について：...*tattha anapadāno ti apadānavirahito. apadānaṃ vuccati paricchedo. āpattiparicchedavirahito ti attho.* 「……そこで、*anapadāna* とは *ap* を離れた者 [という意味]。 *ap* とは『周囲を切る事、限定』 *pariccheda* と言われる。『罪の *pariccheda* を離れた者』という意味。」 (Sp p. 1148)

と述べ、Sp の著者は¹¹⁾ *ap* を「切る」に解すが、これでは *Vism* と *ap* の意味が逆になり、矛盾する。従って、筆者は *Vism* で *ap* が「切断を離れている事」と定義されるのには無理を感じる。少なくとも、*Buddhaghosa* は *ap* が「切り分ける」という意味である事を知っていたが、それでは *sapadāna* の解釈には都合が悪い為、敢えて上の如き解釈を施した、という想像を否定する事はできまい。

尚、*Sadd* [ed. H. Smith] (p. 398): *dāna avakhaṇḍane dānati apadānam*; *Abh* 943 [text 未見。CPD の用例より]: *khaṇḍane apadānaṃ ca itivutte ca kammani.* とあり、*ap* を「分割」の意味に解す。特に *Abh* が *ap* を「分割・過去の出来事・行為」の意とするのは、後代の文献ではあるが注目に値する (1.3, 2.)。

1.2 次に我々は、*ap* が明確に「特徴」の意味で用いられる箇所を見出す。即ち *Bālapaṇḍitasutta*: *tiṇ' imāni bhikkhave bālassa bālalakkhaṇāni bālanimittāni bālapadānāni. katamāni tiṇi?* 「比丘達よ、これら3つは愚者にとって愚者の特徴たち (*lakkhaṇāni*) であり、愚者のしるしたち (*nimittāni*) であり、愚者の *ap* たちである。何れの3つか？」 (M III, p. 163)

此処では *ap*・*lakkhaṇa*・*nimitta* が並記され、三語が明確に同義で用いられている。但し漢訳『癡慧經』(T1, p. 759a) では「愚癡人有三相愚癡標愚癡像」とあり *ap* 相当語は存在しない様である¹²⁾。更に *pa* 註釈は：

tattha bālalakkhaṇāṇi ti bālo ayan ti etehi lakkhiyati ñāyati ti bālalakkhaṇāṇi, tān' ev' assa sañjānanakāraṇāṇi ti bālanimittāni, bālassa caritāpadānāni ti bālāpadānāni. 「此処で bālalakkhaṇāṇi というのは、『こいつは愚かだ』という事がこれらによって lakkhiyati である、〔即ち〕知られるというので bālalakkhaṇāṇi である。こ〔の愚者〕にとって、他ならぬそれらが認知させる諸因である、というので bālanimittāni である。愚者にとっての、所行による ap たち（所行たる ap?）である、というので bālāpadānāni である。」(Ps IV, p. 210) として、ap を carita に関連付ける (1.3)。

さてこの経典はこの後、身口意の三業による諸悪行が「愚者の lakkhaṇa, nimitta, ap」だと述べる。それらの悪行は、換言すれば「愚者の特徴」に他ならない。そして lakkhaṇa, nimitta, ap が具体的には「愚者の行い」を指しているものと看做す事に問題はないだろう。更に、*Bālapaṇḍitasutta* の所説とパラレルな経典が A I, p. 102 に2つ存在し、ap が現れる：*kammalakkhaṇo bhikkhave bālo kammalakkhaṇo paṇḍito apadāne sobhati paññā ti*. 「比丘達よ、愚者とは行為を特徴として持ち、賢者とは行為を特徴として持つ。智慧は ap に於いて輝く。」; *tiṇi imāni bhikkhave...bālāpadānāni...* 「比丘達よ、これら3つは……愚者の ap である……」

この後、身口意の三悪業が愚者の lakkhaṇa であり、身口意の三善業が賢者の lakkhaṇa であると述べ、*Bālapaṇḍitasutta* の所説と平行である事がわかる。此処で述べられる ap が、「身口意の行いの善悪如何」即ち「行いの特徴」もしくは「行いそのもの」を指しているのは疑う余地がない。註釈でも ap を carita と解す：*apadānasobhanī paññā¹³⁾ ti yā paññā nāma apadānena sobhati. bālā ca paṇḍitā ca attano cariten' eva pākāṭā hontiti attho*. 「apadānasobhanī paññā というのは、智慧というものは ap を手段として清らかなになる〔という事である〕。愚者達も賢者達も、自分自身の他ならぬ所行を手段として、明らかなものとなる、という意味。」(Mp II, p. 169)

次に、A V, p. 337 における ap も lakkhaṇa を意味する：kacci panāyamaṃ subhūti saddho bhikkhu saddhassa upāsakassa putto saddhā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito sandissati *saddhāpadānesū ti*. (釈迦曰く)「スプーティよ、信仰ある (saddha) 優婆塞の息子で、信仰の故に家から家無き状態へと出て行った、このサツダなる比丘は、果たして信仰ある人の ap たちにおいて正しく見られるや否や？」

そして、silavat, pātimokkhasaṃvarasaṃvuta, ācāragocarasampanna であったり、kalyāṇamitta, dhammakāma となったりする事などが saddhāpadāna だと釈迦は説く。要は saddha の具体的内容を列挙するのであり、此処でも ap は「saddha の特徴、具体的内容」を指すと看做し得る。註釈も：saddhāpadānesū ti saddhānaṃ puggalānaṃ apadānesu *lakkhaṇesu*. 「saddhāpadānesu とは、信仰有る人々の ap [即ち] 諸特徴において [という意味]。」(Mp V, p. 82) とし、この理解は保証される。

この他、註釈より ap=lakkhaṇa と説明される例として *Pāṭikasuttanta* の ap がある。同経では、獅子の残飯で生きていた傲慢で力有る老ジャッカルが、獅子の如く生きたいと願って獅子吼を為そうとするが、ジャッカルの声しかしなかったという喩を挙げ、釈迦に反目するパーティカプッタに以下の如く述べる：ke ca chava sigāle ke pana sihanāde¹⁴⁾ ti evam eva kho tvaṃ āvuso pāṭikaputta *sugatāpadānesu* jīvamāno sugatātīrītāni bhuñjamāno...『そして卑しいジャッカルは誰か？ 一方獅子吼とは何か？』とまさにこの様に、パーティカプッタ君、汝は善逝の ap たちにおいて生きつつ、善逝の残り物たちを享受しながら……」(D III, p. 24)

此処で註釈は、sugatāpadāna=sugatalakkhaṇa とする：sugatalakkhaṇesu sugatassa sāsanasambhūtāsu tīsu sikkhāsu. katham pan' esa tattha jīvanti. etassa hi cattāro paccaye dadamānā sil'ādiguṇasampannānaṃ sambuddhānaṃ demā ti denti, tesam esa abuddho

samāno buddhānaṃ niyāmitapaccaye paribhunjanto sugatāpadānesu jīvati nāma. 「(sugatāpadānesu とは)、sugatalakkhaṇesu [即ち] 善逝の教説から発生した3つの学習たち (*i. e.* 戒・定・慧の三学) において [という意味]。一方、如何にしてこの者は其処で生きているのか? 実に、この者に4つの縁たち (*i. e.* 四依) を与えつつ、『戒などの徳を完全に具え、完全に覚醒した者たちに私達は与えよう』と [言って] 彼らは与える。この者は覚醒していない者でありながら、彼ら覚醒した者たちのものと定められた [?] 4つの] 諸縁を完全に享受しつつあるので、sugatāpadānesu jīvati という。」(Sv p. 828)。但しこの註釈はかなり後代の解釈が入り込んでいる感がある。CPD はこの一節を ‘gleaning where the Buddha has mowed’ とするが、それを裏付ける資料も存在しない。Veda の avadāna を考慮すれば「善逝の為に切り分けられた(供物?)」とも読めるが、想像の域を出ない。

1.3 以下の例は註釈で「行い」と説明される ap である。まず *Anum-ānasutta* では dovacassakaraṇo dhammo の一つに ap が取り上げられる : puna ca paraṃ āvuso bhikkhu cudito codakena *apadāne* na sampāyati. yam p’ āvuso bhikkhu cudito codakena *apadāne* na sampāyati ayam pi dhammo dovacassakaraṇo. 「更に、友等よ、叱責者によって叱責された比丘が、**ap** に関して説明しない。友等よ、叱責者によって叱責された比丘が、**ap** に関して説明しないという、この事も『悪い言葉に属するものを作る決まり』である。(M I, p. 96)」

そして註釈 (Ps II p. 66) は、「自分の行いに関して (*apadāne ti attano cariyāya.*)」と述べる。また Th 47 :

namo te buddhavīr’ atthu vippamutto. ’si sabbaddhi/
tuhy’ *āpadāne* viharaṃ viharāmi anāsavo ti//

「覚醒した勇者よ、汝に敬礼あれ。汝は全ての点で解放された者である。

汝の **ap** の中で過ごしながら、私は漏入無き者として過ごしている。」

此処で註釈は (Th-a I p. 127)、[tuhyam とは『汝の』[という意味であり] ap とは『教え』 — 即ち、至った道の実践行の中で過ごしながらか [という意味であり] ……(tuhyam tava apadāne ovāde gatamagge paṭipatticariyāya viharam...)] としており、ap=cariyā の図式が見て取れる。少なくとも CPD がこの ap の意味を 2.(b) に充てる根拠は存在しない。

以上の如く、ap=cariyā や carita と解する事は、かつて M. Winternitz が avadāna, ap の原義を「行為」であると主張した事に合致する¹⁵⁾。

1.4 Ap-a p. 101f. は ap の数種類の意味を列挙する。しかし今まで検討した様に、以下に挙げる如き意味は canon には見出し得ない。但し、ap の意味が kāraṇa であると説明する点は留意すべきだと思われる： apadānan ti ettha apadānasaddo kāraṇa-gahaṇa-apagamaṇa-paṭipāṭi-akkosanādīsu dissati. tathā hi khattiyānaṃ apadānaṃ brāhmaṇānaṃ apadānan ti ādīsu kāraṇe dissati khattiyānaṃ kāraṇaṃ brāhmaṇānaṃ kāraṇan ti attho. upāsakānaṃ apadānan ti ādīsu gahaṇe dissati saṃ suṭṭhu gahaṇan ti attho. vāṇijānaṃ apadānaṃ suddānaṃ apadānan ti ādīsu apagamane dissati tato tato tesam apagamanaṃ ti attho. piṇḍapātiko bhikkhu sapadānacārasena piṇḍāya caratī ti ādīsu paṭipāṭiyā dissati gharapaṭipāṭiyā caratī ti attho. apagatā ime sāmāñña apagatā ime brahmañña ti apadānetī ti ādīsu akkosane dissati akkosati paribhāsati ti attho. idha pana kāraṇe dissati. tasmā buddhānaṃ apadānāni buddhāpadānāni buddhakāraṇāni ti attho. 「ap というところで、此処で ap という語は、原因・把捉・退去・順序・悪口など [の意味] で見られる。即ち、[この語は] 「クシャトリヤ達の ap である。ブラーフマナ達の ap である」等という場合、原因の意味で見られる。「クシャトリヤ達の原因である。ブラーフマナ達の原因である」という意味。「男性在家信者達の ap である」等という場合、「把捉」の意味で見られる。saṃ [即ち] 良く把捉する事

がある、という意味。「商人達の ap である。シュードラ達の ap である」等という場合、「離れて行く事」の意味で見られる。それぞれから、彼らから離れて行く事がある、という意味。「〔常〕乞食者たる比丘は、次第乞食に住する事によって托鉢に行く」等という場合、「順序」の意味で見られる。家を順々に行く、という意味。『これら沙門に属する者達は離れて行った。これらブラーフmanaに属する者達は離れて行った』と apadāna する(?)¹⁶⁾」等という場合、「悪口」の意味で見られる。akkosati [即ち] 非難する、という意味。一方、此処〔の ap の用法〕は、「原因」の意味で見られる。故に、ブッダ達の ap たちが buddhāpadāna たちであり、ブッダの原因たちという意味。」

buddhakāraṇa- の意味は判然としないが、恐らく「〔現時点で〕ブッダである事の原因」という意味であろう。これは Ap が「ブッダ等になる為に過去世で行った事を説くもの」である事、つまり Ap が過去物語である事を意味していると思われる。

2. 以上の検討から、pa に於いて ap は (1)切り分ける(2)特徴(3)行状を意味する事が判明した。此処で、(2)と(3)の意味が現れた理由について、若干の推測を述べてみたい。

本来 ava-√dā とは「全体から部分を切り分ける」という意味であると考えられる¹⁷⁾。次に「特徴」とは「全体から目立った一部を取り出したもの」と解し得る。「行状」についても同様に、「ある個人の全体の一部」に他ならない。故に、少なくとも pa の用例からは以下の如き推測が成立すると思われる：(a) apadāna は元来「全体から切り分けられた〔ままの〕もの一部分」を意味した(b)特徴や行為は、「ある総体から切り分けられた、総体を代表する一部」であると解された(c)そこで、ap に「特徴」や「行為」の意味が派生した。これは、かつて Speyer が推測した説¹⁸⁾に同調する。

この仮説をもとに Av の原義を考えると、Av とは「ある特徴的な行為を、一部分切り分け〔て語っ〕たもの、ある個人の生涯の特徴的な行為を

語る過去物語」が原義だった可能性が生じる。Winternitz によると、Sanskrit Lexicon では avadāna/ap は次の様に定義される：(1)行為 [karma] (2)過去に達成された行為 [karma vṛttam, ativṛttam] (3)英雄的行為 [parākrama]、不思議な行為 [adbhutam karma]、清浄な行為 [śuddham karma] (4)出来事、歴史 [itivṛtta]¹⁹⁾。pa の ap が(1)に該当する事は証明された。(3)の意味は「特徴的な行為」と看做し得、pa の ap に反する意味ではない。また(2)(4)の意味は、要するに「過去の行為」であるので、筆者の仮説が正しければ、これらとも抵触しない。

例えば、*Mahāpadānasuttanta* やパラレルの *Mahāvādānasūtra*²⁰⁾、その漢訳経典類は過去七仏の事績とりわけ Vipassin の事績を述べるが、要するに過去に出現した仏が実際にとった特徴的な行動を述べる過去物語に他ならない。この事は、経典中の釈迦の発言によっても保証される。即ち、釈迦が過去七仏並びに Vipassin の事績を語る前に：iccheyātha no tumhe bhikkhave pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttaṃ dhammiṃ kathaṃ sotun。「では比丘達よ、汝らは過去の居所に関する法話を聞きたいかどうか？」(DN II, p. 2≈*ibid.*, p. 10f.) と述べ、経典の内容が「過去世物語」である事を明示する²¹⁾。

以上の筆者の仮説を証明する為には、仏教徒が如何に Av を定義してきたかを観察し、Av の定義で述べられる Av の例を検討する必要がある。更に Av の漢訳語を検討し、その上で pa の ap の意味が上座部独自の展開であるか否かを確定して、Av の語源並びに原義を見極めるべきだが、本稿では紙数の制限上それらを検討する事は出来なかった。これらについては、別稿を期す²²⁾。

註

- 1) 本稿は、拙稿「初期仏教経典における avadāna」『印度学仏教学研究』49の内容の一部を詳述したものである。尚、Editor 名のない pa 仏典は

全て PTS 版を使用し、読みを訂正した場合はその都度註記に記した。
また pa 仏典の略号については CPD の Epilegomena に従った。

- 2) この事については、杉本卓洲「仏教の創世記 — 悪法の始まり —」『五戒の周辺 インド的生のダイナミズム』（平楽寺書店, 1999), pp. 174ff. を参照の事。
- 3) 底本には、Y. Ishihama & Y. Fukuda (ed.), *A New Critical Edition of the Mahāvyaṅgī* (The Toyo Bunko, 1989) を用いている。
- 4) 底本は avalapaś と読むが、文脈上この読みでは意味を為さないので、榊本の読みを採用する。
- 5) S. Dietz, *Fragmente des Dharmaskandha: Ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit* (Göttingen, 1984), p. 11 を参照の事。
- 6) J. Narten, “Das altindische Verb in der Sprachwissenschaft” *Sprache* 14 (1968), pp. 113-134, esp. p. 130 = *Kleine Schriften*, Bd.1 (Wiesbaden, 1995), pp. 76-96, esp. p. 92 を参照。また、J. Narten, *Die sigmatischen Aoriste im Veda* (Wiesbaden, 1964), pp. 138ff; M. Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen* I. Band (Heidelberg, 1986-1992) s. v. DĀ², DĀ⁴ も参照。
- 7) O. Böhtlingk & R. Roth, *Sanskrit Wörterbuch* [PW] (St. Petersburg, 1855-1875) s. v. dā mit ava を参照。また、L. Renou, *Vocabulaire du rituel védique* (Paris, 1954) s. v. avadāna; C. Sen, *A Dictionary of the Vedic Rituals* (Delhi, 1978) s. v. avadāna; K. Mylius, *Wörterbuch des altindischen Rituals* (Wichtrach, 1995) s. v. avadāna. も参照の事。
- 8) 尚、(恐らく) CPD を根拠にして、「pa の ap が刈取りを意味するので、それが karmavipāka や karmaphala といった業の農業的用語と結びつき、Av が、『業果を刈取る』という意味で業報物語を意味する様になった」と主張する、S. M. Cutler, “The Pāli Apadāna Collection” *Journal of the Pāli Text Society* XX (1994), pp. 1-42; J. Tatelman, *The Glorious Deeds of Pūrṇa: A Translation and Study of the Pūrṇāvadāna* (Richmond, 2000) のアイデアは興味深いのが、現実には ap が kammaphala や kammavipāka と用いられる例を筆者は現時点で発見していない。
- 9) PTS 版は sāpadānaṃ だが、Harvard Oriental Series 版より訂正。
- 10) この事について、阿部慈園「Buddhaghosa と Pāṇini — *indriya, śīla, dāna, khalu* —」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』16 (1984), pp. 289-

- 285, esp. p. 287f. を参照の事。
- 11) 森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究——アツカターの上座部的様相——』(山喜房仏書林, 1984), p. 469f. によると、Vism も Sp も Buddhaghosa の真作と一応諸学者に承認されているが、確實視されている訳ではない。
 - 12) この例と、前掲 SBhV が ap を avalava に置換する例を見ると、説一切有部の文献は故意に ap/avadāna の語を排除しているかの如くである。説一切有部は Av の technical な意味との混同を避けたのかも知れないが、あくまで想像の域を出ない。中阿舎の「標・像」の原語の検討は勿論、広く有部系文献を精査する必要があるが、現時点の筆者の限界を越えており、今後の課題である。
 - 13) canon と註釈で読みが異なるが、註釈が apadānena sobhati と説明している所を見ると、本来は canon の如き読みだったと推測される。
 - 14) この一節の -e ending を、東部方言男性単数主格と解す。Sv p. 828: ke ca cheve (*sic*) sigāle ti ko ca lāmako sigālo ke pana siha-nāde ti ko pana siha-nādo. Cf. H. Lüders, *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons* (Berlin, 1954), p. 15.
 - 15) M. Winternitz, “avadāna, apadāna”『萩原博士還暦記念祝賀論文集』(復刊, 山喜房仏書林, 1972), pp. 7-12. を参照の事。更に、Winternitz が未検討の例として、*Kautiliyārthasāstra* [KAŚ] の用例を挙げる。KAŚ は、ap を文脈上「犯罪行為」の意味で用いる: śaṅkaṇīye deṣe linge pūrvāpadāne ca gṛhitam anuyuñjita. 「疑わしい場所〔にいたり、疑わしい〕人相〔をしていたり〕過去の ap で捕えられた者を尋問すべし。〕 [2.36.36]; gṛhitān pūrvāpadānasahāyān anuyuñjita. 「捕えられた者達を、以前の ap や仲間について尋問すべし。〕 [4.5.11]。この他にも、3.12.35 [信託物を横領する文脈]、4.6.2 [pūrvakṛtāpadāna, 嫌疑をかけられるべき者のリストに現れ、前科者の意]、4.8.26 [pūrvakṛtāpadāna, 拷問をかけるべき者の文脈] に ap が現れる。註釈では: pūrvāpadāne ca pūrvakṛte cauryādivṛtte ca pratite sati [Śrīmūla ad 2.36.36]; kārupūrvacaritaṃ [ad 3.12.35]; pūrvakṛtāpadānasahāyān pūrvakṛtāni cauryāni... [ad 4.5.11]; pūrvakṛtāpadānam pūrvam anyatra kṛtacauryam [ad 4.6.2]; pūrvakṛtāpadānam pūrvakṛtacauryam [ad 4.8.26]。一方、avadāna を Kangle の校訂本は一度挙げるが、T. G. Shastri の校訂本では ap の読みを採用し、

実際 avadāna という読みか疑わしい (Kangle の挙げる異読では ...apadānatvāt とある) : pitṛpaitāmahān amātyān kurvīta dṛṣṭāvādānatvāt.「先祖代々〔の家臣達〕を大臣達と為すべし。〔彼らの〕avadāna が見られたという事の故に」[1.8.16]。Kangle は、この avadāna が肯定的な意味で用いられているので、ap と区別されるべきだと考えたのだろうか。しかし、ap そのものに善悪の基準が内包される訳ではあるまい。従って、Kangle の avadāna という読みには疑問である。1.8.16 に対する Śrīmūla 註 : dṛṣṭāpadānatvāt dṛṣṭaṃ sāksād anubhūtam apadānam pūrvavṛttam... 又、Winternitz が未検討の *Mahābhārata* にも ap が現れる (1.140.11, 2.5.37, 3.16.21, 8.45.56, 12.329.20, 15.16.13 等)。紙数の都合上検討は省くが、2点のみ指摘する。1) ap は文脈上「特徴的な行為」を意味するが、常に良い意味で用いられてはいない (1.140.11, 12.329.20)。更に 3.16.21 の ap は「配分」の意味の可能性もある (但し Nilakaṇṭha は upadhāna と読み、viśeṣa の意味と解す)。2) Critical Ed. は毎回 avadāna を異読に挙げる。これは ap/avadāna が流動的であり交替可能であった事実を示す証拠の1つとなり得る。

- 16) paribhāsati と動詞で説明する以上、apadāneti (ap の Denominativ?) と読むべきに思われるが、かような動詞形は CPD も用例を挙げず、筆者も現時点で他に用例を見出していない。
- 17) PW s. v. dā mit ava. ava に ‘herab, weg’ の意味がある事については、B. Delbrück, *Altindische Syntax* (Halle an der Saale, 1888), p. 449f. を参照の事。
- 18) J. S. Speyer, *Avadānaçataka: A Century of Edifying Tales Belonging to the Hinayāna* (St. Petersburg, 1906-1909), vol. II, p. iii f.
- 19) M. Winternitz, *op. cit.*, p. 9.
- 20) 写本には経典名が欠落しているが、*Abhidharmakośa-upāyikā* は、長阿含中の ‘ṣaṣṭrakanipāta’ の1つに ‘rtog pa brjod pa chen po’i mdo’、即ち *Mahāvadānasūtra* の訳語を挙げる。本庄良文「ウパーイカー所伝の長阿含」『印度学仏教学研究』33-2 (1985), pp. 783-779, esp. p. 781. を参照。‘ṣaṣṭrakanipāta’ については、J-U. Hartmann, “Der Ṣaṣṭraka-Abschnitt des in Ostturkistan überlieferten Dīrghāgama” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* Suppl. 10 (1994), pp. 324-334 が参考になった。

- 21) *Mahāvādānasūtra* には対応箇所がないが、『大本經』には「汝等欲聞如來識宿命智於過去諸佛因緣不」(T1, p. 1c)「吾今欲以宿命智説過去佛事汝欲聞不」(T1, p. 3c) とある。「因緣」という語は、nidāna の訳語ではなく、単に「いわれ」という程度の意味と思われる。その事は、後で単に「事」と訳す事から推測される。『佛説七佛經』では単に「汝等樂聞」(T1, p. 150a) とだけある。また『七佛父母姓字經』：「若曹欲聞已去佛及父母諸弟子姓字不」(T1, p. 159b);『增壹阿含經卷第四十五不善品第四十八入前品中』：「汝等欲得聞過去諸佛神智之力乎姓字名號壽命長短耶」(T2, p. 790a) とあり、pa と比べ具体的である。
- 22) 概略は、前掲拙稿を参照。尚、ジャイナの用例の検討も必要だが、筆者は白衣派聖典中に未だその用例を見出していない。但し後代のジャイナ教文献である *Śāribhadracarita* は、自らその内容を *dānadharmakathā* であり *danāvadāna* であると述べる。この事については、M. Bloomfield, “The Śāribhadra Carita: A Story of Conversion to Jaina Monkhood” *Journal of the American Oriental Society* 43(1923), pp. 257-316, esp. p. 260; N. Balbir, “The Micro-genre of *Dāna*-stories in Jaina Literature: Problems of Interrelation and Diffusion” *Indologica Taurinensia* XI (1983), pp. 145-161 を参照。

(大学院後期課程学生)